

宇治川と宇治平等院

正会員 建設省建設大学校 松浦茂樹

A Historical Study on Relations between Uji River
and A style of Byodo Temple

by Shigeki Matsuura

概 要

天下の名刹・宇治平等院鳳凰堂の建築形態は、宇治川の氾濫あるいは湛水に備えたものではなかったかとの仮説を述べるものである。

1053(天喜元)年、藤原頼通によって落慶供養された鳳凰堂は、中堂とその左右にのびる翼廊と尾廊をもっている。翼廊は楼造で下層は吹放しとなっており、上層には高欄がめぐらされているが、その梁は低く人が立って歩くことはできない。純粋に形を整えるために造られたものと評価されているが、この吹放しの翼廊は河川技術からみればピロティ様式の建物である。

平等院は宇治川のすぐ辺りにあり、鳳凰堂の前面にある園池には、宇治川から自然取水された水が入っていた。また往古の河床高、氾濫状況、築堤の状況から判断して、洪水で宇治川の水位があげられ、園池の水位もそれに従って上昇していた。その高さから見て中堂が水に浸ったことはないであろうが、翼廊部も含めてその回りは出水時には湛水していたと考えて間違いのない。水に浮かぶ阿弥陀堂であり、翼廊はこれに備えてピロティーにされたと判断するのである。

さて、出水時は上にみた通りであるが、平常時にも翼廊部は水に浸り、そこを舟が行き来したと考えても物理的には可能である。頼通は自分の邸宅である高陽院で、寝殿の回りの池・堀割を大きく造り、大きな舟が行き来できるようにしていた。この形態は高陽院のみであった。頼通がこの発想を平等院にも応用した、と考えてもおかしくない。水上に浮かぶ宗教建築物、それは1168(仁安3)年ないしその翌年、平清盛によって造営が完成した海に浮かぶ厳島神社へと連想させていく。
〔キーワード・鳳凰堂、河川環境、宇治川〕

はじめに

平等院阿弥陀堂(鳳凰堂)は十円玉の図案にも利用され、誰でも知っている天下の名刹である。1053(天喜元)年、藤原頼通によって落慶供養されたが、その位置は宇治川のすぐほりにある。本小論では、鳳凰堂の建築形態に宇治川が重要な影響を与えたのではないかという仮説を述べるものである。

1. 鳳凰堂の特徴¹⁾

鳳凰堂は阿弥陀像を安置する中堂と、その左右にのびる翼廊と尾廊より構成される左右対称の建築物である(写真-1)。その前面には「極楽の宝池」として位置づけられていただろ園池が広がり、阿弥陀像は真東を向いて安置されている(図-1)。



写真-1 鳳凰堂(撮影：松浦、1990.3.21)



図-1 平等院境内図(昭和36年作図)

出典：「平等院大観第1巻」岩波書店 1988 P9

翼廊は図-2でみるように楼造で、下層は吹放しとなっている。上層には高欄がめぐらされているが、その梁は低く、人が立って歩くことはできない。翼廊は90度曲がり、池に向かって伸びるが、その曲がり部の上部に宝形造の楼閣をのせる。ここだけ外観が三階となるが、同様に吹放しである。つまり翼廊、楼閣とも透廊である。

このような吹放しの二階翼廊あるいは楼閣は、いずれも実用的な機能はなく、純粹に形を整えるためだけに造られたものと評価されている。そしてこの形態は、寺院建築史上、平等院ではじめて出現したと考えられている。

我が国の寺院建築史上、このような特徴をもつ透廊の翼廊は、河川技術からみればまさにピロティ様式の建物である。図-3で建物の高さ関係が分るが、河川氾濫があっても湛水害を避けることのできる高床式の建物である。鳳凰堂の翼廊、楼閣の二階部分は実用に供されるものでないので、二階を湛水害から守るものではない。しかし宇治川の氾濫に備えて、

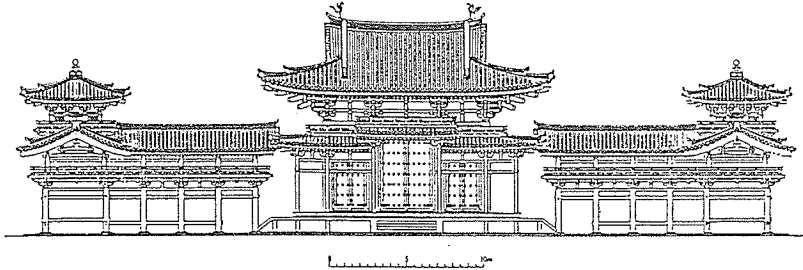


図-2 鳳凰堂立面図

出典：「平等院大観第1巻」岩波書店 1988 P28

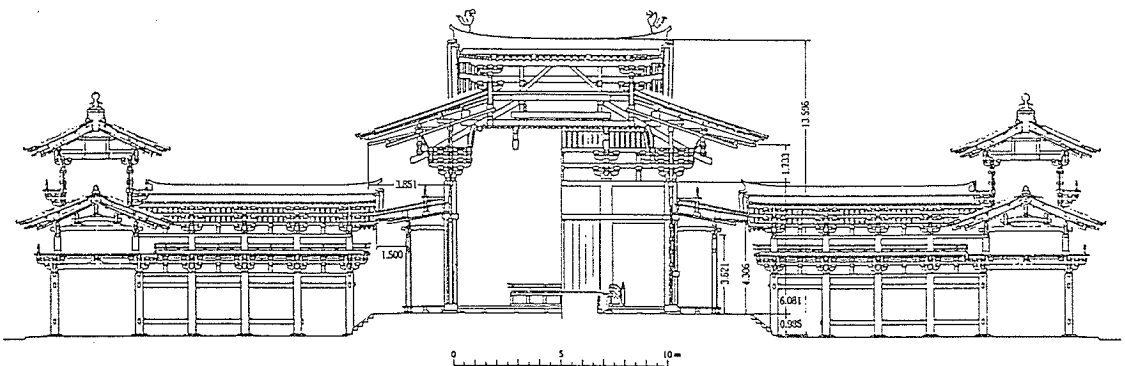


図-3 鳳凰堂断面図

出典：「平等院大観第2号」岩波書店 1988 P28

あるいは宇治川の氾濫を組みこんで造られた透廊ではなかったのかと考えるのである。

二階造りの翼廊の下層を吹き流しとした寺院としては、その後、1077(承暦元)年白河天皇によって供養をみた法勝寺金堂、1136(保延2)年鳥羽上皇により平等院を写して鳥羽の地に造られたという勝光明院がある。

2. 平等院からみた宇治川

平等院は宇治川に隣接して造られたが、ここは琵琶湖を発した瀬田川が途中、宇治川となり、溪谷部から山城盆地への出口にあたっている。このため平等院からは緑深き朝日山、仏徳山が宇治川のすぐ対岸に望まれる。これらの山々はそれ程高くもなく、こじんまりとして形がよい。これらの山の姿そして木々は、私達に親しみを覚えさせてくれる。

この地点での宇治川の流域面積は約4,200km²、このうち琵琶湖流域が約3,850km²で、これを除いた流域面積は約350km²である。約2億6千万m³の水を貯える我が国最大の湖沼・琵琶湖からは、常に枯れることのない豊富な水が流れ出す。

平等院わきの宇治川岸に立つと、上流には山々に囲まれた溪谷美、下流はそれが一転し、広く展開する平地の中を勢いよく走る滔々とした水の流れが一望できる。この地は、たぐいまれな風光明媚な地である。また、奈良と京都を結ぶ交通の要衝という地の利もあって、平安貴族に注目された。

この地に初めて別荘を開いたのは、左大臣源融といわれる。彼は京都鴨川畔の大邸宅内に名勝地奥州塩釜の景を写した大池のある庭を造り、難波から海水を運ばせて潮焼く煙をたなびかせたという人物である。当代随一といってもよい風流入が別荘を開くほどの、誠に魅力あふれた自然景観をもつ土地柄であった。この地はその後、宇多天皇、源重信に継がれ、999(長保元)年藤原道長の手へ渡った。そして道長の子・頼通によって鳳凰堂が建立されたのである。

鳳凰堂が建てられたこの地を宇治川との関係でさらに詳細にみると、この地は宇治川が平地部に出る最上流端に位置する。地形的には、緩やかな扇状地の地形の最上流部ないし先端部にあたる。鳳凰堂は地形的に引っこんだところにあり、宇治川の激流が

直接襲ってくることはない。阿弥陀堂の回りの園池は地形的にみて人工的に掘られたのではなく、宇治川の氾濫・土砂堆積の過程の中で窪地、沼地として残されたところだろう。湛水する自然の沼地を利用して、浄土庭園が整備されたのだろう。

往年の園池は、現在に比べかなり広がったことが伝えられている。²⁾その後氾濫土砂の堆積等によって狭まったのであろうが、往年、園池には塔ノ島にわたる喜撰橋附近より取りいれた宇治川の水が流れこんでいた(図-4)。この水は園池から流出した後、農業用水路井川となって下流の灌漑に利用されていた。

自然地形特性より、農業用水路が扇状地の扇頂部で取水される事例は多くの河川でみられるが、宇治川上流部にも同様にあったのである。それは河原石等を使った簡単な堰、草堰で取水されたのだろう。そして宇治川出水の時には、より多量の水が園池に流れこんでいたことは、他の河川から推定して間違いないことだろう。たとえば荒川によって形成された埼玉平野の熊谷扇状地では、荒川の出水の時、派川であるかのごとく大量の水が用水路取水口から流入していた。³⁾

なおこの取水口は、現在、下流の橋橋対岸のところまで移されポンプで取水されている。1925(大正14)年完成した大峰ダムにより流出土砂が減り河床が低下したため、現況になったのであるが、それ以前の取水点付近の宇治川標準水面高はE.L.17mくらいと推定されている。³⁾

このように阿弥陀堂を取りまいている園池は、宇治川と密接な関係をもっていた。現在、宇治川と園池は堤防で分けへだてられている。この堤防の築立

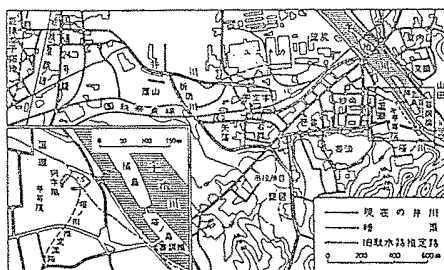


図-4 宇治川からの取水

出典：「宇治市史2」 宇治市役所 昭和49年 P619

経緯はよく分らないが、1776(安永5)年、平等院前から宇治橋下流にかけての左岸堤170間について上・下流の激しい地域対立が生じていた。⁹⁾ この時、上流では堤形の水除けの置土をしたのだが、下流十ヶ村は「大雨の時などこの堤のために著しく河水が増し、洪水の危険性も高くなって甚だ迷惑をする。直ちに新たな置土の分を取り払え」と述べた。つまり出水の時は上流の左岸で氾濫していたが、築堤によってそれが下流に流れてくるようになったと主張したのである。

これに対し上流側は「右之場所、水除け置土仕り候儀は全く新規にては御座無く、前々よりの仕来り」と述べ、1699(元禄12)年河村瑞賢が淀川筋を改修した時、川幅を拡げ浚渫してこの場所に置土した。この後40年間は水難を免れていたが、年々堆砂によって川床が高くなり、このためこのあたりは「仮初めの出水にも上越し仕り、町中が川筋に相成り、潰家流家出来仕り、甚だ難儀之場所」と、水難の場所になったと反論した。

結局は、新たに作った堤は土を引きならし、河床が高くなっているところはこの時の河床に準じて「是迄仕来りの水除け」を施すという条件で和解が成立したが、ここで興味深いことは、出水時上流の左岸で容易に水が溢れていたことである。また平等院前で堆積が生じ、河床の上昇が生じていたことである。この堤防が現在のように高くなったのは明治時代で、それまでは冷泉為恭の屏風絵(「宇治川真景図」屏風)に描かれているように、宇治川東岸から阿弥陀堂の全容が望まれていた。⁹⁾

以上、園池への取水状況、築堤・氾濫からみて園池と宇治川水位とは密接に関係があり、宇治川水位があがればそれに従って園地の水位も上昇していたことが分かる。1961年(昭和36年)に作図された平等院境内のE.L.は、阿弥陀堂のある中島で16.5m、園池で16.035m、また阿弥陀堂の基壇の高さは約1mである(図-1、図-3)。また、宇治川からの取水口の通常時の水位は、以前は17mであった。これより宇治川出水の時、園池水位が上昇し、翼廊、楼閣のある中の島に水が浸れ、水の中に浮かぶ阿弥陀堂であったことが推測される。ただし、基壇の高さ、また記録より判断して、阿弥陀のある中堂が水に浸っ

たことはないだろう。だが翼廊、楼閣の透廊、つまりピロティ様式は、湛水に備えた建物であったと判断されるのである。

なお出水時、園池の水位が上昇し、翼廊のところまで水が押し寄せたことは、戦後のことであるが、白州正子によって報告されている。白州はキティだったかキャサリン台風であったか風雨の強い時、平等院を訪れ、「宇治川は逆巻く波を土手に打ちつけ、池も水かさを増して、鳳凰堂の回廊まで押しよせて来ていた。(「極楽いぶかしくは」¹⁰⁾)と述べている。

戦後のこの当時、宇治川と園池を結ぶ用水路はなかった。またこの文章より堤防上に著しい溢水があるとは判断されない。それでも園池の水位は上昇しているのである。これはもちろん地水による水位上昇もあるが、それとともに堤体、あるいは堤防下を通しての宇治川の透水も大きかったと思われる。ここが建設省直轄に編入されたのは1959(昭和34)年であるが、それ以前、部分的に割石で積み上げられていた堤体から透水があったといわれている。現在では、河道改修が進められるとともに直上流に天ヶ瀬ダムが築かれ河床はかなり低下している。このため湧水も止まったので、平等院は地下からの揚水により池水を補給している。

さてこのように宇治川出水時に園池の水位が上昇し、翼廊等は水の中となり、水の中に浮かぶ阿弥陀堂であることを述べたが、その状況は出水時のみであったろうか。平常時はいかがであったろうか。1780(安永9)年刊の「都名所図会」、1860年(万延元年)の「宇治川西岸一覽」でみると分かるように、近世後半には翼廊も含めて阿弥陀堂はすべて中の島上にある(図-5)。しかし平常時に中堂以外は水中にあるという想定は、物理的にはそう困難なことではない。宇治川からの取水量が多ければ、あるいは池からの排水水位が高ければ可能であるし、また宇治川の河床が高ければそれと密接な関係のある園池の水位は高くなる。そして河床が治水のため人為的に掘削されて水位が下降し、近世には中の島がくっきりと表われたと考えることもできる。

これを考える上で興味深い建物がある。平等院の建造主藤原頼通が自らの邸宅として建てた高陽院であるが、太田静六により図-6のように推定されて

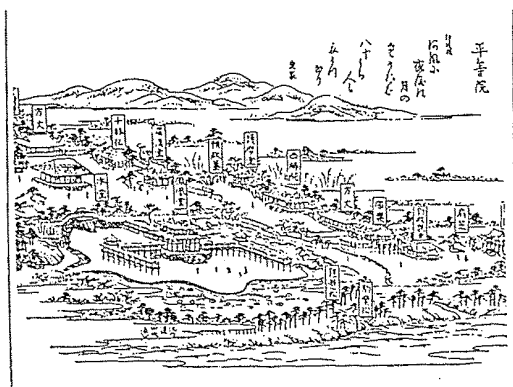


図-5 近世の鳳凰堂周辺図

出典：「新修京都叢書 第十一巻 都名所図会」

新修京都叢書刊行会 昭和43年 P330

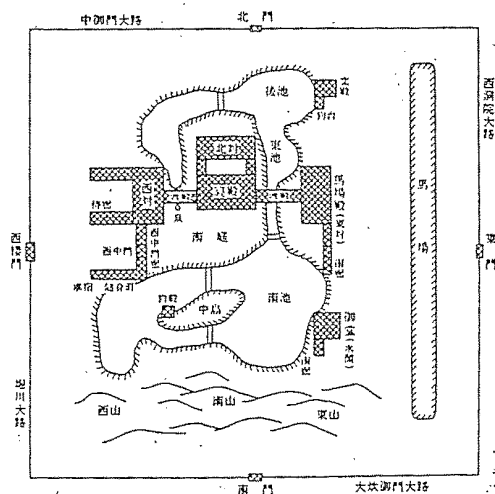


図-6 宇治関白藤原頼通の邸宅「高陽院」推定復原図(万寿元年、駒鏡行幸当時)

出典：太田静六「平等院鳳凰堂の源流」

早稲田大学文学研究科紀要27号, 1957

いる。⁹⁾ 太田によると高陽院の最も大きな特徴は寝殿の周囲が池や堀割で囲まれていることで、後池と南池とを結ぶ水路は10人以上も乗った大きな船が通る程、水量も多く幅の広いものだった。これは当時、普通の寝殿造りで行われる遣水とは異なり、高陽院が最初で唯一のものだったという。つまり頼通が造った高陽院のみが、船で渡殿の下を通して上・下に行き来したのである。平等院も同じく頼通が造った

建物である。ここでも廊の下を船で行き来するという発想を頼通がもったとしても何ら不思議でない。またこの意図で翼廊を設計したと仮定したならば、船の行き来の便のため、翼廊下、楼閣の一階部分を高くし、結果的に二階の天井が低くなったと考えて納得がいく。

藤原頼通が建立した当時の状況は残念ながら分らない。1067(治暦3)年、初めて行幸がおこなわれ、「池上錦繡の飯屋を架し、池中竜頭鵲首の船あり、童衆を奉し訖んぬ」と、扶桑略記にこの時の状況が述べてある。園池の中に竜頭鵲首の船が浮んでいたことは間違いない。果してこの船が翼廊、楼閣の下を通ったかどうか。

このように平等院と宇治川とは極めて密接な関係があった。少しでも出水時には、水上に浮ぶ阿弥陀堂であったことは間違いないだろう。水上に浮かぶ宗教建築物。それは、1168(仁安3)年ないしその翌年、平清盛によって造営が完成した海に浮かぶ厳島神社へと連想させていく。

なお鳳凰堂の一部である尾廊はピロティーにはなっていない、地面よりそう高くもないところの白壁の建物である。しかし現在の尾廊は後に改造されたものであり、以前は吹放しであったといわれている。³⁾ また創建当初はなかったのではないかと想像されている。¹⁰⁾ 尾廊が現在ピロティーになっていないことをもって、これまで展開してきた仮説を否定することはできない。

参考引用文献

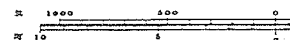
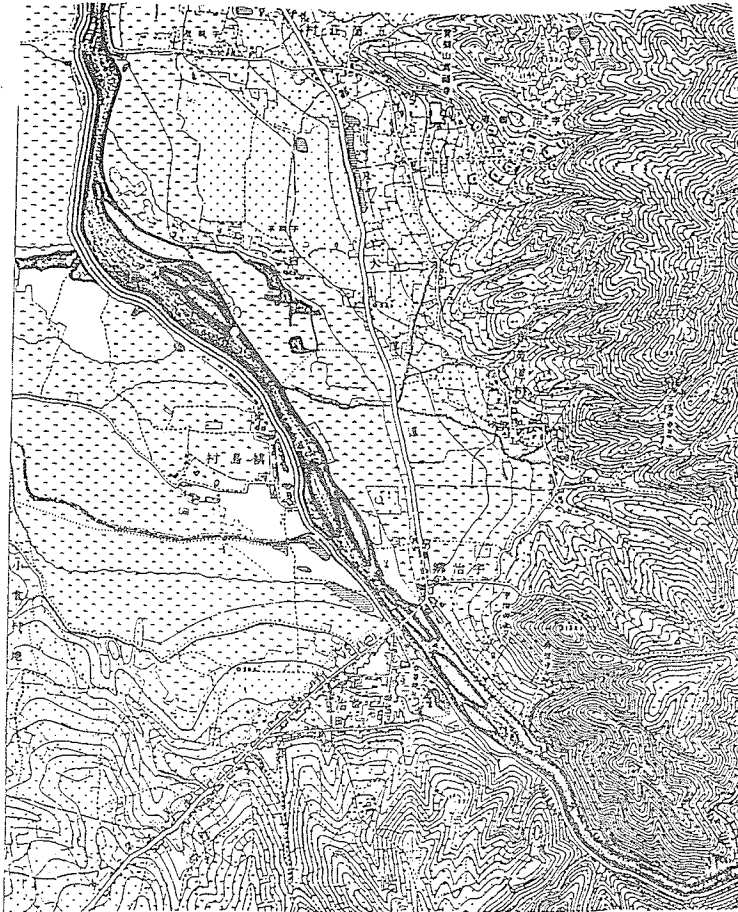
1) 主要参考文献

- ・「平等院大観第1巻」 岩波書店 1988年
- ・杉山信三 「平等院鳳凰堂に関する二、三の問題」 清交16号 1941年
- ・林屋辰三郎他 「宇治川」 光村推古書店 1980年
- ・森 蘊 「平等院庭園考」 日本建築学会論文報告集9号 1938年

2) 「宇治市史 2 -中世の歴史と景観-」

編集責任者 林屋辰三郎 藤岡謙二郎
宇治市役所 昭和49年 P620

- 3) 土木研究所報告 「沖積低地における河川処理の計画論的評価に関する研究」 松浦茂樹
昭和61年 建設省土木研究所 PP58～63
- 4) 「宇治市史 2 -中世の歴史と景観-」
前出 P620
- 5) 「宇治市史 3 -近世の歴史と景観-」
編集責任者 林屋辰三郎 藤岡謙二郎
宇治市役所 昭和51年 PP324～326
- 6) 「江戸時代図誌第2巻 京都二」 林屋辰三郎・森谷尅久編 昭和51年 筑摩書房 PP106～107
- 7) 「平等院鳳凰堂」 毎日新聞社
- 8) 太田静六 「宇治関白藤原頼通の邸宅高陽院」
日本建築学会論文報告307号 1981年
- 9) 10) 杉山信三 「平等院鳳凰堂に関する二、三の問題」 前出



平等院周辺地形図
明治21年参謀本部陸軍測地局による「京阪地方
仮製二万分之一地形図「宇治」より